

08

泥染め

タンニンと鉄分との反応を利用して、独特の色調に染め上げます

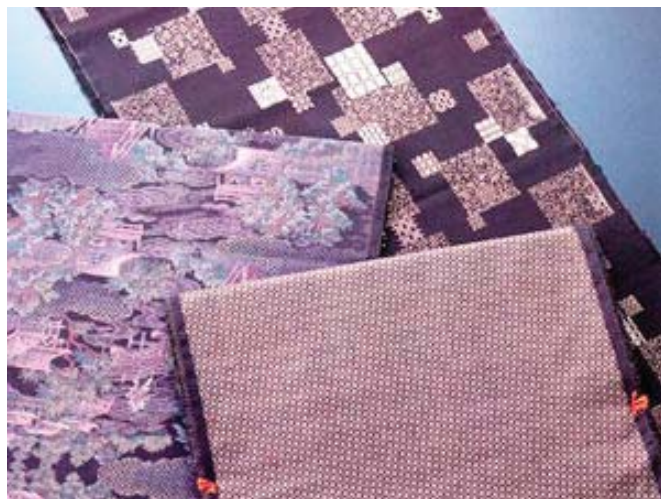
泥染めは、本場黄八丈（東京都）、本場大島紬（鹿児島県・宮崎県）、久米島紬（沖縄県）などの染色工程に用いられている染色技法です。「泥染め」といっても、泥は染料として用いられるのではなく、染料を発色させたり繊維に定着させたりする媒染剤として用いられます。

奄美大島では7世紀頃から、手で紡いだ絹糸を泥染めした織物の生産が行われており、それが本場大島紬の発祥と伝えられています。明治時代以降は、鹿児島県本土や宮崎県都城市などでも本場大島紬が生産されるようになりましたが、本場大島紬の泥染めができるのは奄美大島だけです。

伝統的な本場大島紬に使用される染料は、車輪梅（奄美の方言では「テーチ木」と呼ばれます）という植物です。でき上がりの図案に合わせて絹糸と防染のための木綿糸とを織ったものを、車輪梅の樹皮や根を煎じた汁に繰り返し漬けていくうちに、車輪梅に含まれるタンニンという色素成分によって、赤褐色に染まります。それを、鉄

分を多く含む奄美大島の泥に漬けると、タンニンと鉄との反応によって、しだいに黒褐色の色調を帯びていくとともに、染料が繊維と強く結びついて水に溶けにくくなるのです。ちなみに、紅茶に蜂蜜を入れると黒くなることがあるのも、紅茶に含まれるタンニンと蜂蜜に含まれる鉄分との反応によるものです。

車輪梅に数十回漬けては泥に一回漬けるという作業を数回繰り返し行うことによって、独特の渋い黒の色調に染まります。このようにして染めたものをほどいた後、今度は絹糸だけを再び織るとというのが、伝統的な泥染大島紬の大まかな製造工程で、完成までにはほぼ1年の歳月がかかります。（平成22年11月）



協力：本場大島紬織物協同組合 <http://www.oshimatsumugi.com/>